

胡桃三十詰めし袋をほうと持つ

藤田湘子

胡桃とのつきあいは、酒場のカウンターでくるみ割り器の扱いに格闘していた若い頃の思い出くらいだが、あの形と、割った時の「胡桃の部屋」の造形は好きである。乾き物としての胡桃しか知らない私は、胡桃の木に胡桃が成っているところを見たことがない。

しかし、湘子はどうやら大の胡桃好きであるらしい。全句集を紐解けば、例句は二十一句ある。安曇野通いをしていた頃、宿のあたりに胡桃の大きな木があつて、秋には落ちた胡桃をいっぱい拾ったという。以来折にふれて、胡桃の句の作句を楽しんでいた様子が伺われる。

胡桃二つころがりふたつ音違ふ 『白面』

もはや掌の濕り胡桃の暗部まで 『春祭』

1978年 (553作) 第五句集『春祭』 鑑賞・野本京